

未明童話における「雲」の描写法（1）

－白系と黒系の色彩語に触れて－

山 口 幸 祐

はじめに

小川未明童話における「色彩語」とそれが修飾する対象となるもの（「対象」）を分類すると、「自然（1）」と「植物」が多いことがわかる。「自然（1）」は、「空・太陽・月・星・雲などの天体の他に雨・雪・霧・夜・夕方・四季などの自然現象を含む」分類だが、本稿は、その一つである「雲」に焦点を当てて未明童話における色彩語使用の特色を考察するものである¹⁾。

[I] 「雲」を対象とする色彩語

一般的に、童話に限らず文学作品であれば自然描写の一つとして「雲」が出てくるのはごく当たり前のことである。しかし、それがどのように描写されているかによって意味合いは違ってくる。未明童話の場合もその例に漏れず、雲の描写は数多い。しかし、未明童話では色彩語を修飾語にして描写されている点に特徴がある。例えば、続橋達雄氏は、「深山の秋」（『真理』1935.12）に触れて、「白い雲から触発される抒情が作品に色どりをそえている。」と言い、「町はずれの空き地」（『教育行童話研究』1937.1）については、「白い雲に人生的な意味を持たせてさえている。」と述べ²⁾、また、関秀雄氏、西本鶏介氏は、未明の独特の文学を表現するときに「赤い夕焼けの雲」の比喻を使う³⁾。

以上は、「白い雲」と「赤い夕焼けの雲」を取り上げて語られる例だが、改めて「雲」の色彩表現に目を向けてみると、多彩な色彩描写に気づかされるのである。

一例を挙げると、「山の上の木と雲の話」（第3巻）では、「あんなに美しい雲を見たことはありません。その雲は、じつに美しい雲でした。にこやかに笑っていました。体には、紅・紫・黄・金・銀、あらゆるまばゆいほどの華やかな色彩で織られた着物をまとっていました。髪は、長く、黄金色の波のようにまき上がっていました。その雲は、おそらく大空の年若い女王でありましたでしょう。ゆうゆうと空を漂って、この山を過ぎるのです。」と描かれている。「じつに美しい雲」を「紅・紫・黄・金・銀、あらゆるまばゆいほどの華やかな色彩で織られた着物をまとって」と、むしろイメージしにくいほどの多彩な色彩によって表現しているのだが、用いられる色彩にはそれぞれ特徴があると考えられる。

以下、「雲」を対象とする色彩語の種類、及びその特徴について見ていく。

〔Ⅱ〕「雲」を対象とする色彩語の種類と色彩語数

1. 色彩語の種類

表1のように、「雲」を対象とする色彩語の種類は全部で23色ある⁴⁾。実に多彩な色彩描写がなされていることがわかる。白系、黒系、赤系が多く、青系、黄系が少ないのが一目瞭然である。見方によっては、金・銀系の数も多いと感ずる場合もあるかもしれない。「雲」を対象とする色彩語の種類からは未明独特の感性と感情、さらには思想も息づいている⁵⁾と考えられるのである。

表1 [雲の色彩語表]

青系	3	赤系	35	黒系	49	白系	68	黄系	4	金/銀	14
紫	3	赤	21	黒	34	白	66	きつね色	2	金	11
		こはく色	3	灰色	12	乳色	2	黄	1	銀	3
		うす赤	2	ねずみ色	2			だいたい色	1		
		桃色	2	赤銅色	1						
		淡紅色	1								
		うす桃	1								
		たいまい色	1								
		ばら色	1								
		紅梅色	1								
		とき色	1								
		石竹色	1								
1色		1 1色		4色		2色		3色		2色	
全 2 3 色											

2. 色彩語数

次に、色彩語数を見てみると、『定本小川未明童話全集』全16巻⁶⁾には706作品収載されているが、それを対象にして調べてみると、色彩語を修飾語とする「雲」が描かれている作品は113編ある。

ちなみに、巻数別の作品数は表2の通りであり、そのうち、数の多い作品順に上位6作品を上げると表3のようになる。なお、表2の()内は収録作品数である。

表2 [色彩語を修飾語とする「雲」の数]

第1巻	7編 (43)	第2巻	4編 (47)	第3巻	7編 (39)	第4巻	9編 (42)
第5巻	2編 (48)	第6巻	8編 (43)	第7巻	6編 (45)	第8巻	10編 (42)
第9巻	4編 (34)	第10巻	7編 (56)	第11巻	4編 (36)	第12巻	12編 (42)
第13巻	14編 (43)	第14巻	11編 (35)	第15巻	4編 (69)	第16巻	4編 (43)

表3 [色彩語を修飾語とする「雲」の数の多い作品]

巻数	作品名	色彩語とその数	個数
第9巻	『雪原の少年』	赤1/黒1/白3/灰色4/こはく色1	10個
第13巻	『雲と子守歌』	赤4/白4/紫2	10個
第16巻	『うみぼうずとおひめさま』	赤2/黒7/桃色1	10個
第3巻	『山の上の木と雲の話』	赤1/紫1/黄1/金1/銀1/灰色2	7個
第14巻	『空にわく金色の雲』	赤1/金4	5個
第10巻	『曠野』	黒1/白4	5個

【Ⅲ】「雲」を対象とする色彩語の使用例

1. 白系の色彩語

「雲」を対象とする色彩語で最も多いのは「白系」だが、それは当然、「村の子供たちが、その木の下に集まって、遊ぶ時節がきたのです。五月の風は、さわやかに吹いて、白い雲が、空を流れてゆきました。」（『雪原の少年』第9巻）のように自然描写の一つとなる例が多いからである。

同様に、「白い雲」をより際立たせるために、次のように、「青い空」と対照的に描写される場合も多い。

- (1) 空の色が、青々として、白い雲が高く野原の上を飛んでゆきます。（『銀のペンセル』第7巻）
- (2) 海のように、青い、青い空を、旅人はぼんやりと仰向けになってながめていました。
小さな白い雲、ややそれよりも大きい雲、ほんとうに大きな白い雲、いくつかの雲が鬼ごっこでもしているように、追いつ、追われつしていました。（『曠野』第10巻）
- (3) 二人の少年は、松の木の頂と、さらにはるかに高く、遠い、青い空に浮かぶ、白雲を見上げて笑っていました。（『町はずれの空き地』第12巻）
- (4) 星晴れのした、青い夜の空を白い雲が走っていました。もうどこもなくゆく夏の姿が感じられたのです。（『二百十日』第12巻）

自然の中の「白」と「青」のコントラストを見事に切り取っていると同時に、(4)のように、夏の夜を描写して季節の移ろいまで描ききっている。「白い雲」の走りによって、題名通りの「二百十日」の日を描いている。

また、この「青い空」と「白い雲」のコントラストは、「海」と「船」に見立てた表現として用いられる例も見られる。

(5) 青い海のような空には、白い雲がほかけ船の走るように動いていました。(「はちの巣」第10巻)

(6) 白雲を見ていると、青い空の奥の方から、自分を迎えにくる小船の影が、小さく、小さく、見えるような気がしました。(「笛と人の物語」第7巻)

(5) の場合は、「白い雲」の速い動きを表しているが、童話という性格を考え、(4) と比較してみるとイメージしやすい比喻とすることができるだろう。

ところで、(2) と (6) の場合について、少々触れておかなければならない。両者とも、色彩のコントラスト、海と船の比喻をとまなう表現という点では他の例と共通だが、(2) の「曠野」は、「雲の鬼ごっこ」とあるように、「八月の赫灼たる太陽の下」、「曠野の王者のごとく、ひとりそびえている」一本の松の木の前で休息する旅人が、「忘れていた幼友だちの名まえと、顔つきをはっきりと思い出し、生まれ故郷の野原で「自分もその仲間にはいつ、いっしょに走りっこをしている姿」を思い浮かべ、「みんな、あの時分の友だちはどうしたろうな。」と追憶の思いに浸っているのである。生まれ故郷を離れて長年流浪、漂泊している旅人の旅愁と故郷や幼友達を思う郷愁も「白い雲」に託して描かれている。前掲、続橋達雄氏が、「町はずれの空き地」(第12巻)について、「コリントのお爺さんは故郷を離れて流浪し、ふたたび生まれ故郷に帰ってきたという。それが白い雲とかさねあわせてとらえられている。この老人の放浪にも憧憬と郷愁の未明文学の特徴が顔を見せている。」という指摘²⁾は正鵠を得ている。それは、「白い雲」(第11巻)という題名を持つ作品にも表現されている。石の採取に興味を持つ少年が、河川工事現場に運ばれてくる石が「埼玉や、茨城の方からくるんだ。」と聞き、「なんとなく石の故郷がなつかしい気がして、思わず、大空の果てをながめると、「先のとがった森影が、まぶしい日の光に霞んでいて、遠くの地平線には、白い雲が頭をもたげている」と描かれる。河原の石にさえも、その故郷、そして流浪や旅を感じる少年の心にも、旅愁や郷愁の思いが満ちているのである。

(6) の場合は、空をぼんやり眺めている一人の青年が、諸地方を旅する飴売りが吹くチャルメラ(外国製の笛)の音を聞いているうちに、青い空に浮かぶ「白い雲」から青い海原に漂う小舟を想起する。そして、その小舟は「熱帯植物のしげっている島」から自分を迎えに来たものと空想する場面である。これは、青年の異国(南国)への憧れが生んだ空想であり、作品の末尾ではさらに、この青年の老いた姿をも描いて若き日への追憶をも描いている。同様に、「白いくもとにんぎょう」(第15巻)は、青い空に浮かび漂う「白いくも」を見て、遠い所へ行くことを夢見ている「にんぎょう」の話である。

以上のように、「白い雲」に託す主人公たちの心情は様々な形で描かれていることがわかる。すなわち、「白い雲」には、旅愁、漂泊、郷愁、憧憬の意味が込められ、童話作品のテーマを

構成しているということができよう。

2. 黒系の色彩語

白系の色彩語の次に多いのが黒系の色彩語だが、黒系の色彩語の対象となる「雲」は、例えば、
(7) このとき、はるか、沖の方から黒い雲が起こってまいりました。たちまち空は曇って、墨を流したようになり、風がヒューヒューと空を吹いてきました。けれど、昔から立っている塔は、その風のためにびくともいたしませんでした。姉の姫は、この急に変わった、ものすごい空の模様をながめて、どうなることだろうと案じていました。（「黒い塔」第1巻）

のように、「白い雲」と同様、自然現象の一つとして、風雨、雷、嵐のような悪天候を表すものや、冬の到来を示すものとして描かれる場合が多い。ただし、突然の天候の異変は人知では図りしれないものとして受け止められ、不安や恐怖を生む。そこに悪いことの予兆や前兆、また、その暗示の意味が「黒い雲」に託されるのである。

(7) の「黒い塔」では、姉姫の不安や心配が現実のものになるという結末を迎える。主人公の美しい姉姫は病や怪我のために醜い姿になって、母である女王や街の人々からも疎外され、幽閉された不思議な黒い塔の中で一人孤独な思いにとらわれている。そのとき、沖の方では「真っ黒な壁を築いたように海が浮き上がり、津波が「ひどいとどろきをあげて陸に向かって押し寄せて」、街全体をのみつくして、かなたの野原の方まで、一面に海となってしまう」のである。しかし、姉姫のいる不思議な黒い塔は被害を受けず、不思議な赤い船に救われるのだが、ただ単純な理由のために疎外や幽閉を行ってしまう人間界の醜い姿に、それを超えた存在によって罰が下されたと提示するのである。「黒い雲」はその予兆として描かれていた。

「黒い塔」のように人間の世界を超えた存在と異なる世界を提示して物語を構成するのは未明童話の特徴の一つだが、自然現象を描く場合、それを支配する存在としてより一般的な具体像を提示する場合がある。

(8) 急に、空模様が変わってきたので、あたりをこいでいた船は、あわてて港をさして逃げました。／さあ、今年の冬の踊りおさめに、みんながうたって、騒いでくれ。」と、一人の神が命令すると、風は、凱歌をあげ、幾百千万の波は、手をたたいて乱舞し、黒雲は、雷を鳴らして、火を振りまわしながら駆け回り、そして、ここににぎやかな、舞踏会は開かれたのでありました。（「海の踊り」第6巻）

(9) このときまで、じっとして、沖の黒雲の中にガラスのような目つきをして、氷の着物を被た老婆は、こちらを見ていたが、風が、いくら戦っても、もはや、かなたの平原をとりもどすことができなくなると知ると、頭を振りました。彼女の白髪は黒雲の中に、電光

となって閃いたのであります。(「死と自由」 - 「土の炎」第8巻)

(10) 学者は、「ここから、数千里、東方に向かって旅をしますと、死の国と常夏の国とがあります。怖ろしい高い山脈に添うて、北へゆけば、死の国へゆき、南へゆけば、常夏の国にゆくことができます。／死の国には、深い谷があり、つねに黒雲は谷をめぐり、雷鳴がとどろき、草木は枯れ、鳥は地に落ち、すべて生きるものとてありません。一方常夏の国では、緑の森があり、百花は咲き乱れ、山には果物が実り、また、谷には、らんの花が香って、滾々として泉がわいています。この泉の水を飲んだものは、百歳、二百歳、まだ子供のように老ゆることを知らないのです。」と、申しました。(「金のおのと人形」第8巻)

(8) の「海の踊り」は、海に神々の存在を想定し、荒れた海は、神々の舞踏会によるものと想像して物語を構成する。風や波や黒雲は神々の命によって「凱歌」を上げ「乱舞」し、「黒雲は、雷を鳴らして、火を振りまわしながら、駆け」る賑やかな宴になるというのである。これは海を征服しようとする人間に対してその威力を示す行為として描かれるのだが、ただ、そこには貧しいが親孝行の若者には慈悲深く対処する女神の存在も描かれていて、自然の脅威を語りつつ、ある時には恵みを与えるものという未明の自然認識の一端が現れている。

また、(9) の「死と自由」は、「黒い影」と「土の炎」の二章立てで、前者は死を表し、後者は「新しい生命」の誕生をテーマとして構成された作品である。「土の炎」では、まだ冬の名残の強い時期に、砂から小さな芽を出した植物が太陽の光を吸収して「真っ赤な花を咲」かせるが、花を咲かせるのはまだ早いと「風が、狂猛に襲いかか」る。しかし、花は、「くびを垂れて風をやり過ぎ、そして、虚を見ては、頭を上げて、なよなよと精いっぱい力で戦った」のである。それをじっと見ていたのが、「沖の黒雲の中にガラスのような目つきをして、氷の着物を被た老婆」で、小さな花の力強い抵抗を見て、ついに、「電光をほとばしらせ、雷を鳴らして、残りの雪と風の軍勢を従えて、もっと北の方へと引き上げて」行くのである。

冬から春へという季節の移り変わりを「冬の精」と「小さい赤い花」の対照として描くのは未明童話ならではの発想ではあるが、その場合、「黒雲」は「冬の精」が存在する場所である。

さらに、(10) の「金のおのと人形」は、「あらゆる権威と力を示す貴い品」、「金のおの」を持つ王さまの、ただ一つの憂いは老いと死だったが、その父王の老いを悲しみ、不老不死を願って「常夏の国」へ旅する姫の物語である。「黒い雲」は「死の国」を蔽う不気味な存在として描かれている。

北国生まれの未明にとっては、自然は驚異、かつ、脅威であり、また畏怖の対象でもあった。その体験、経験から生まれた空想や想像力から「黒い雲」のイメージが定着され、童話制作の原動力になったと考えられるが、次には、時代・社会の動向の中から得たと思われる素材を取り扱う作品に就いてみることにする。

- (11) たかは、黒雲に、伝令すべく、夕闇の空に翔け上りました。古いひのきは雨と風を呼ぶためにあらゆる大きな枝、小さな枝を、落日後の空にざわつきたてたのであります。（「あらしの前の木と鳥の会話」第4巻）
- (12) ちょうど、そのとき、前よりは、いっそう、大きくなって、雷の音が、とどろいたのでした。木は、顔色を失って、蒼ざめて、ふるえはじめたのです。たかは、空にまき起こった、黒雲を目がけて、高く、高く、舞い上がりました。そして、その姿を雲の中に、没してしまいました。たかは、黒雲の中を翔けりながら、雷に向かって、叫びました。（中略）正直で、信じやすい雷は、たかのいうことに従いました。そして、雷は、方向を転じて、都の方へ進んでいきました。黒雲は雷に、従いました。そして、さながら前ぶれのように冷たい、湿っぽい風は、野面を吹くかわりに、都会の上を襲ったのです。（「ぴかぴかする夜」第5巻）
- (13) いよいよ冬となると、自然は、日ごろ侮っている人間に対して、復讐を試みようとなりました。波は怒って岸をかみ、黒雲は乱れて頭の上を越し、風は、いっしょに家を持っていこうとしたのです。（「からすの歌」第9巻）

(11) の「あらしの前の木と鳥の会話」は、開発の名の下に自然破壊を繰り返し、また、鳥獣、牛馬を酷使する人間たちに対して、林の王たる古い檜の木と鳥獣の王たる鷹が中心になった自然界と鳥獣たちの復讐を描く。雨と嵐を起こす役割を果たすのが「黒雲」である。

(12) の「ぴかぴかする夜」は、野原の高い一本の木が雷を恐れて、鷹に依頼して雷を都会に向かわせる。雷は、「燈火のきらきらとついた都会をながめ」、「ゴウゴウとなりとどろく、汽罐のうなり音や、車輪のまわる音や、いろいろの蒸気機関の活動するひびきをき」いて、「遠慮をしなくてもいいだろう」という気を起こし、「都会の上を襲」う。ここにも未明の反都会の姿勢がかいま見られるが、雷は「黒い雲」とともにある。

(13) の「からすの歌」は、富くじが当たって大金持ちになり拝金主義に陥った男をこら懲らしめようとする自然界の復讐を描く。その象徴として怒濤、風とともに、「黒雲」が描かれている。

いずれも「自然の掟」、「自然の復讐」という言葉が使用され、自然の驚異と脅威、また畏怖の念を忘れてしまった人間に対する警告の意味が込められた作品群である。ここに、未明の自然崇拜、あるいは反都会の姿勢が現れている。

「黒い雲」の場合は、「白い雲」の旅愁や郷愁の感情、また憧憬と違い、悪事や想像以上の出来事が起こる前兆、予兆を表し、さらに、人知、人為を超えた存在を想定し、自然現象の驚異と脅威を表現するために独特の色彩イメージを使用していると言えるだろう

おわりに

以上、色彩語を修飾語とする「雲」について、その概要、及び、白系、黒系の描写の例を見てきた。本来ならば、全ての色彩語の例を見なければならぬが、特に、赤系の場合は最初に見たように多種多様、また、多彩であり、稿を改めて考察しなければならないと思われた。また、金銀系は赤系と関連するため同時に取り上げる必要がある。

付記：本稿は、金沢近代文芸研究会2006年度6月例会において「未明童話における『色彩語』について－調査結果から－」と題して、藤本紗貴子との共同研究の結果を報告した中の一部である。この場を借りて会員諸氏のご指摘、ご教示に感謝申し上げます。その発表をもとに今回、山口の責任において取りまとめたものである。なお、例会発表概要は金沢近代文芸研究会発行『イミタチオ』第46号（2007.1）に掲載済である。

注：

- 1) 「色彩語」の「対象」分類に関しては、山口幸祐・藤本紗貴子「未明童話における『色彩語』について－調査報告－」（『富山大学人文学部紀要』第45号, 2006.8）所載の「表3・〈対象別基本6色色彩語表〉」に基づいている。その分類の基準については種々問題があり、検討課題も多いことは既に指摘されているが、新たな分類基準を示すにいたらず、「自然（1）」に含まれる自然現象の一つとして「雲」の描写のあり方について考察するものである。なお、「色彩語」の「対象」分類の基準については、基本的に、大藤幹夫『宮沢賢治童話における色彩語の研究（改訂版）』第三章・「一 色彩語抽出の基準」（日本図書センター、1993.6）に従っていることをお断りしておく。
- 2) 『定本小川未明童話全集』第12巻「解説」（講談社、1977.10）
- 3) 関秀雄氏は、未明の文学について、「世界観としてのアナーキズムと文学観としてのロマンチズムは、夢みる人、激情の人、孤独の人未明の強い個性の中に溶解されて、一方で社会と人間の悪を告発する激しい現実否定と、他方で、赤い夕焼けの雲の彼方に、現世では到達不可能な、人間性の善美の調和する架空の楽園を夢想する独特の文学（その適切な表現形式としての童話文学）を生み出した。」と述べている（『定本小川未明童話全集』第16巻「解説」（講談社、1977.12）。また、同様に、西本鶏介氏も『『金の輪』の太郎にとって死ぬことは夕焼け雲のかなたにはいっていくこと』と表現している。（『定本小川未明童話全集』第14巻「解説」（講談社、1978.2）
- 4) 色彩語の分類については、前掲、山口・藤本「未明童話における『色彩語』について－調査報告－」参照。また、基本的に、大藤幹夫『宮沢賢治童話における色彩語の研究（改訂版）』の示す基準に従っている。
- 5) 大藤幹夫氏は、前掲書で、「自然は単なる叙景の対象」ではなく、そこに未明の「思想なり感情が息づいている」と述べている。
- 6) 1976（昭和51）年11月～1978（昭和53）年2月、講談社刊。以下、講談社版『全集』と略記する。なお、引用作品についてはその収録巻数を示すこととする。